

【佳作】

豚の人

国際日本学部 国際文化交流学科2年 沖津 美花咲

ヤン医師は、昔、妻子との生活を放棄し、貧しい人々に慈愛を注いでいたことがあった。しかし、かえって妻子は彼の行爲を喜んで見守り、事あるごとに「誇らしい。さすが私たちの」と、愛おしそうに彼の胸と腹にそれぞれ頬ずりをした。そのたび、彼は、体に残る二つの熱に心が焼かれる思いがした。

その年の十月、ヤン医師の心痛は留まるところを知らず、ついに彼は部屋から出てこなくなつた。妻子がいくらドアを叩いても、いくらドアノブを回しても、彼の心は開かなかつた。ひとつため息をついた妻は、友人の大男に電話をかけ、夫の部屋のドアを蹴破るよう密かに依頼した。妻は受話器を置くと、窓辺に寄っていき、カーテンの胸倉を掴んでその全身を思い切り眼前に引きずり出した。秋葉が散り始めた様子を伝える四角い窓の外には、幾人かのボロを着た人々がいて、空虚なまなざしでヤン医師宅の玄関扉をそぞろに見つめる様子が確認できた。妻はまたひとつ、今度は大きなため息をついた。

数日後、妻の友人である大男が貧民を分けてやって来、ヤン医師の部屋のドアを蹴破り、妻と

子と大男とで中へと押し入った。すると、不思議なことに、ヤン医師はどこにもいなかった。そこにはただ、冷えたベッドと、消し屑ばかりの机と、雑然とした本棚とが向かい合つて沈黙しているだけだった。

それから、冬が来て、春が来て、雪が解け、陽光が植物を育て始めた。その頃、ヤン医師は、家族から遠く離れた西の地に住居を構え、一人静かに暮らしていた。それでも彼の心は痛む一方で、白衣を脱いでからは尚のこと痛むようになった。以前は、時々彼の家付近に隣住民が訪れ、彼の危うい様子を気にして世話を焼くこともあったが、それが、あわよくばヤン医師の恩恵に無償であやからうという算段であることを彼が見抜いてからは、彼の孤独は山頂の豹のそれよりもずっとひどくなった。彼は、世の花が開くまでを、己が鈍い心音と痛みと共に過ごした。

揺り椅子の軋む音が止まったのは、よく晴れた春の日の昼下がりのことだった。アンドレ・ブランという名の青年がヤン医師宅の門を叩いたのだった。ブラン氏はヤン医師の応答がないのを確かめたが、めげずに名前を呼び続けた。対して、

ヤン医師は窓辺にしゃがみ込み、じっと息を殺して青年が引き下がる時を待ち続けた。すると、ブラン氏は周囲を気にする素振りを見せながら、通りに出、突如として咆哮を上げた。当然通りを歩いていた者は奇異の目で彼を見て、またある者は好奇の目で彼を見た。ヤン医師は、これから青年を中心にして起こりうる展開に眩暈がして、思わず彼を自宅に引きずり込んだ。

「先生、よろしければ、私を豚にしてくださいませんか」

ブラン氏は、ヤン医師に案内されるがままソファに座るなり、先のようなことを言った。ヤン医師は耳を疑い、聞き返したが、再び同じ文言を繰り返されたため、今度はどちらの頭が、あるいは耳がおかしいのかを考えなければならなくなった。「どういふつもりだね、君は」と、一旦落ち着いて、彼はブラン氏の話に傾聴する姿勢をとった。すると、ブラン氏は急に顔色を曇らせ、静かにしゃべりだした。なんでも、ブラン氏は空虚な人間なのだという。試験や競技会の成績も、両親の職業も、家の大きさも、通っている学校も、彼が持つもの、その何もかもが誰の気も引かないの

だそう。

「先生、これは惨めなことじゃありませんか」

「いや、どうだろう。君はそれを誰かに指摘されたわけじゃないだろう」

「ええ、誰も私にそんなことはしませんでした。むしろ私は、平凡であったがために、多くの人に愛されてきたのですから」

ヤン医師は、彼の面差しにそれを確かに感じた。彼の瞳の奥に、優しい思い出が鮮明に見えた気がしたのだ。しかしその一方で、豚になりたいという彼の願望の処はますます霧の中に消えるようだった。すると、ヤン医師の心中を察したブラン氏は、目前の百面相に向かつて言った。

「誰でもない、私自身が、私を指摘するのですよ」
彼は、彼自身によって向けられる刃先の鋭さに恐れおののいているといった様子だった。両膝を静かに床につけ、ヤン医師に縋りつく彼の姿が、それを如実に物語っていた。

「お願いします、先生。もう心が痛くてどうしようもない」。そう言ってブラン氏はヤン医師の膝あたりに顔をこすりつけた。ヤン医師は彼のみすばらしい姿に少し泣きそうになってから、空を仰いで、数分間の沈黙ののち、最後には静かに頷いた。

半年後、ヤン医師はブラウン管越しに豚の人をよく見るようになった。ワイドショーの司会とこやかに語り合う様子は異様だが、彼は心なしか嬉しそうだった。以前彼からかかってきた電話では、学校でも世間でも人気者になり、疲れるが楽

しいといった内容が語られた。それ以降、彼との音信はしばらくの間途絶えていたが、それも人気者であるという証拠なのだろうとヤン医師は思っていた。

「いやはや、アンドレ・ブランさん。テレビに出ずっぱりですから、収入も相当なものになったのでしよう。噂によれば、五千万円の豪邸を一括で購入したとか」

「そうなんです。両親も喜んでくれています」

「はあ、その体になって、人生が良い方向へと一変しているのでしょうか。他に何か素晴らしい出来事はありませんか」

「実は、そうですね、ガールフレンドができました。最近はスケジュールの合間を縫ってよく会っています。私にはもったいないくらい美人です。ああ、あとは、ファンクラブができましたね。私に会いに、わざわざ遠方から足を運んでくれたり、手紙やプレゼントを贈ってくれたりするんです。この姿になってから、社会に認められた気がして……うん、嬉しいですよ。とてもね。もう昔には、戻れないかもしれません」

「共感しますよ。持つことはとても喜ばしく、持たぬことはとても嘆かわしい。人生、持つてこそ、意味があるんです。特に、若いときの苦労は買ってでもしないと。大人になって、何も持たない人はそれができていなかった。磨かれなければ、ダイヤモンドも無価値ですから、そういう人はこの世にいてもらわなくて結構。そうは思いませんかな」

そこで、ブラウン管は、クロロホルムで眠らされたかのようにすっかり寝息を立て始めた。ヤン医師は、リモコンをテーブルに置くと、窓辺に寄っていき、カーテンを束ねた。そして、窓際に佇む揺り椅子に腰掛け、秋雨の窓に打ち付ける音を耳にしながら、外で濡れる木々を眺め、今はもう過ぎ去った日々を考えていた。医者である自分と、その家族と過ごした日々。貧民たちへと差し伸べた手のひら、尊敬のまなざし、感謝の言葉、笑顔、抱擁、愛情。そして、胸の痛み。

実はこのところ、ヤン医師を襲う胸の痛みは再び頻度が増した。「時々」に収まっていたのが、「常に」になった。この事態の原因に、ヤン医師は思い当たる節があった。それは、多数寄せられる取材やテレビ出演の依頼、加えて診療の問い合わせであった。なにもかも、例の豚からの恩恵だった。ヤン医師は人見知りであることを口実に前者は断ったが、後者については困っている人々の手前、断ることができなかった。休診日に関係なく毎日ヤン医師を訪れる人、人、人。それも、金持ちばかりが権威や立場を振りかざし、そうでない人々を押しつけ、体調不良ではなくブラン氏を手本とした体の改造を訴えてくるのだった。そうしてヤン医師宅を出る頃には彼らは豚になって、各々の家族に帰宅を告げた。ヤン医師は、その一連の流れを見届けることがとてもつらかった。彼らに対して悪しき猿の手が手招きをしているのだが、自分こそが闇に隠れてその手を動かしている黒幕のように思えてならなかったのだ。そ

して今、自分も悪しき手を取り、こいねがう直前まで来ていることに、ヤン医師は気がついていて。着ている白衣の胸ポケットに潜む小切手が、猫なで声を上げた気がした。一体、この胸の痛みがどこから来て、自分が何者になりたくて、どこへ行くこうとしているのか。空一面の雨雲の下、彼方まで広がった澱んだ海の上で、彼の心は彷徨い続けた。

ヤン医師が頭を抱えてうずくまること、数分経った。玄関の呼び鈴が鳴ったため、ふらりと立ち上がったから白衣を整え、彼はおぼつかない足取りで玄関へと歩いて行った。

扉を開くと、アンドレ・ブラン氏がそこに立っていた。彼は、「今度は居留守をしないでくれましたね」と、ヤン医師をからかった。ヤン医師は、精一杯の笑みを見せた後、出会った時のようにブラン氏をソファに案内した。

「おや、ソファを替えられましたか。座り心地がいい。これはベレ・フラウでしょう」

「ああ、家具はすべて新調したんだ。以前では…満足できなかったから」

「さようでしたか。ところで、私は折り入って、先生にお礼参りに来たのです。先生のおかげで、人生が豊かになりましたから。私が出演している番組は見てくださいましたか。今ちょうど放映されているものもあります。これが傑作でして。有名な大御所の司会者と馬が合って、今度リストラントで食事をする事になったんです」

ブラン氏は、尻尾の先を丸めて興奮したまま、

鼻息荒く彼自身の現状をしゃべりだした。しゃべり尽くした後、彼は黙ったままのヤン医師に気を遣って、「ヤン医師の方はいかがですか」と言った。一方のヤン医師は、力なく答えた。

「順調さ。おかげさまで、医師としての威厳…をまた取り戻せた。白衣を脱ぐ暇がないくらい忙しいさせてもらっている。今日だって、これから患者が大勢来る。昨日なんか、有名な総合病院から手紙が来て、そこで働かないかと打診されたんだ」「すごいですね。もちろんそちらで働くことにならるのでしようね」

「いや、検討中さ。でも、今のところ、断るつもりだ」

「それはいったいどうして。もっといい思いができるのに。向こうには何でもありますよ。権力、地位、金、女、食事…全部手に入る。満足しないなんて、あり得ない。全部を手に入れて、多くの人に求められ、愛され、羨望され、それではじめて私たち人は意味を持つのに」

「なぜ断るんです」と、躍起になったブラン氏はヤン医師を見つめて言った。その瞳の奥は、以前とは打って変わって見る影もないほどに暗かった。ヤン医師は、その深淵を覗いて、覗き込まれて、自身も引きずり込まれそうになっているように感じた。また、その時初めて、ヤン医師は諸悪の根源を認識した。それから彼は目を伏せて、論ずような声で答えた。

「何もない、ありのままの自分でいたいとは思わんかね」

ヤン医師の答えに、ブラン氏は目を丸くした。目を丸くしたかと思うと、彼の瞳が揺れて、次第に水気を帯びて潤み始めた。

「先生、勝手ながら私を人に戻してただけませんか」

ブラン氏の数分前との変わりようにヤン医師はたいへん戸惑ったが、一も二もなく了承し、すぐにブラン氏を覆う豚の皮を剥がすための手術を行った。ヤン医師には、彼の求めるものが分かったのだった。

途中、診療開始時間になっても開かないからと玄関扉を叩いて権力者たちが邪魔をしてきたが、怒声を上げて追い返した。八時間の後、ブラン氏は少し歪ではあるが、ヤン医師の手によって元の人の形に戻ることができた。

術後、ヤン医師が手術室からリビングへ移動すると、暗い部屋の中、ブラン氏が鏡に映る自身の姿を見ながら、ぼうっと立っていた。求めていた姿に戻ったはずだが、彼の心はここにあらず、といった感じだった。

「どこか痛むかい」

ブラン氏は、ヤン医師には目もくれず、鏡の中の自分を見つめたままだった。不意に、片手を伸ばして鏡に映る自身の頬を撫でたかと思うと、いきなり両膝から床に崩れ落ちておいおい泣き始めた。彼は顔を涙でぐしゃぐしゃにして、半ば狂ったように叫んだ。

「この痛み、痛み、痛みだ」

ヤン医師は、白衣を脱ぎ、そっとソファに掛け、

その体でブラン氏へ一步、また一步と歩み寄って行った。そして、目下に彼の姿を認めると、そばに片膝をついて、肩を優しく抱いてやった。彼もまた、ヤンの胸に上半身を預けた。ヤンは、彼の耳元で静かに告げた。

「そうだ、この痛みだ。この痛みと生きるんだ。何もない自分を愛すんだ」

ずっと降り続いてきた雨はすっかり上がって、室内にはブラン氏の悲痛な声とヤン医師の重い息遣いだけが響いていた。秋空に浮かぶ月は、青年の目から落ちる涙、その一粒一粒を闇夜の中で光り輝かせていた。二人は暗がりのなか手を取りあい、苦痛とともに生きる幸福を痛いほど噛み締め、憂鬱を胸に静かな新しい朝の始まりを感じた。

コメント

私が高校生のとき、倫理の授業で功利主義者であるジョン・スチュアート・ミルの言葉に出会いました。それが、「満足した豚であるよりは、不満足な豚である方がよい」という言葉でした。これは、快楽の質を指摘したもので、単なる快楽よりも精神的満足を追求すべきという考えのもと主張されました。この言葉を忘れて過ごしていたある日、某SNSで、プロフィール欄に今までに取得したであろう素晴らしい資格の数々をこれまたずらりと並べて紹介している高校の同級生のアカウントに遭遇しました。その時に冒頭の言葉を思い出し、「社会で求められている人間になる（何者かになる）ことと、何者でもないありのままの自分であることは、どちらが質の良い快楽か」と考えるようになりました。結局、分からなかったため逆説的に考えて苦悩に焦点を置いてみました。すると、前者では求めると同時に求められる苦悩、後者では何もない苦悩（劣等感？）は存在するだろうというところまでは考えられました。個人的には、ありのままであることは現代社会では生きにくいのかなと思います。皆さんはどう思いますか。